指定管理者が行う公の施設の管理状況報告（令和6年度分）

＜県の評価等＞

施設所管部名： 農林水産部

1 指定管理者の概要等

施設の名称及び所在	伊賀上野ぴよクエの森（三重県上野森林公園） （伊賀市下友生字松ケ谷1番地）
指定管理者の名称等	NPO法人 ECCOM 理事長 森 豊 （三重郡菰野町小島 4059）
指定の期間	令和3年4月1日～令和8年3月 31 日
指定管理者が行う管理業務の内容	1 県民の森の森林、植物等の管理に関する業務 2 県民の森の施設、設備の維持管理及び修繕に関する業務 3 県民の森の施設、設備の利用に関する業務 4 自然体験型イベントの実施に関する業務 5 ホームページ等による県民の森内の自然情報やイベント情報の提供に関する業務 6 生物多様性の保全に配慮した取組に関する業務 7 その他県民の森の管理上必要と認める業務

2 施設設置者としての県の評価

評価の項目	指定管理者の自己評価		県の評価		コメント
	R5	R6	R5	R6	
1 管理業務の実施状況	B	B			普段の清掃、適切な植物管理、日々の巡回による異常箇所の早期発見など、施設の適切な維持管理、環境の美化に努めている。 また、森林の整備は公園ボランティア「モリメイト」との協働により適切に行われている。
2 施設の利用状況	A	A			年間施設利用者数は 121,980 人、目標達成率は 148.8%となり、過去最高の施設利用者数を更新したことは評価できる。
3 成果目標及びその実績	A	A			施設利用者の満足度は 94.4%（目標 80%）、自然体験型イベント参加者の満足度は 96.1%（目標 92%）となり、ともに目標を達成している。

※「評価の項目」の県の評価 ：

「＋」（プラス） → 指定管理者の自己評価に比べて高く評価する。
「－」（マイナス）→ 指定管理者の自己評価に比べて低く評価する。
「 」（空白） → 指定管理者の自己評価と概ね同じ評価とする。

総括的な評価	① 成果目標については、全ての指標で目標を達成している。 ② 森林、植栽木、芝生等の植物管理を適正に実施し、良好な景観の維持に努めている。利用施設の保守点検、日常点検、清掃を適切に実施しており、施設利用者が安全で快適に利用できる環境を整えている。 ③ 施設利用者のために、インターネットによる広報や利用受付を行い、イベント情報を中心とするメールマガジンを希望者へ配信するなど情報発信を積極的に行っている。また、伊賀地域の小学校やこども園等の子ども達を対象とした自然体験プログラムを開催するなど、森林教育の場としての環境づくりに努めている。 ④ イベントについては、感染症対策を徹底したうえで、観察会等の自然体験型イベントやものづくり、展示会等も含めて、126 回（このうち自然体験型イベントは 112 回）開催しており、自然体験型イベント参加者の満足度は 96.1%と高く、積極的に自然とふれあう場を提供している。 ⑤ 公園ボランティアの「モリメイト」との協働で森林の整備を実施し、生態系に配慮した管理を行っている。また「みえ生物多様性推進プラン」に沿って、希少動植物の保護や外来生

	物の駆除等の取組を行っており、生物多様性の保全に努めている。 ⑥ 業務執行体制については、事務分担・責任の所在を明確にするとともに、職員を森林公園管理事務所に常勤4名、非常勤2名を配置している。また、危機管理に関するマニュアルを作成し、自然災害や公園内での事故対応及び報告体制を平日・休日ともに整備し、適切に対応している。 ⑦ 施設利用者のニーズにあった公園管理を適切に実施したことにより、令和6年度においても全ての目標を達成し、森林、環境学習のための施設利用者の増加や、より良いサービスの提供につなげている。今後も引き続き、施設利用者の満足度向上につながる新たなサービスの提供に取り組まれたい。

＜指定管理者の評価・報告書（令和6年度分）＞

指定管理者の名称： NPO法人 ECCOM

1 管理業務の実施状況及び利用状況

（1）管理業務の実施状況

①三重県上野森林公園管理事業の実施に関する業務

誰もが日常から気持ちよく来園できるよう、植物管理、施設管理をはじめとした園内管理を徹底するとともに、「三重県上野森林公園」の持つ自然環境を最大限に活用したイベントを実施することにより、公園のPR並びに施設利用者の増加に努めた。

また、ダイバーシティに配慮し、多様な施設利用者が公園の自然を楽しみ、その素晴らしさを感じ、やすらぎや学びを得ることのできる活動を行った。それにより施設利用者のウェルビーイング（心身の健康と幸福）が促進されるとともに、公園をはじめとした地域の自然が愛され、大切にされる「人も自然も笑顔になれる公園」をめざし、以下のような事業を行った。

ア）三重県上野森林公園の施設及び設備の利用に関する業務

- 窓口業務として、自然情報や公園利用に関する問合せに対応し、開花状況の提供や散策ルートなどの提案を行った。また、電話やメールによる各種問い合わせの対応を行うとともに、イベント申込の利便性を高めるため、スマートフォンやパソコンから自動受付できる予約サイトの運営を行った。
- 園内各施設の団体利用に関して窓口での利用申請受付のほか、インターネットによる広報や受付も行い、事前に施設の情報提供や利用方法の案内を行った。また、施設利用者の要望を受け、職員が自然観察ガイドや自然体験教室を実施するなど、施設利用者へのサービスに努めた。
- 流行性感染症対策として、園内の利用の多い場所にアルコールを設置し、手指の消毒を励行した。
- ビジターコテージ展示室では、図書コーナーとキッズコーナーを設置し木製の遊具を設けたことで、館内の滞在者数、滞在時間ともに増加し、好評を得ることができた。また、本物の生きものを間近で見てもらう機会を拡充するため、両生類や昆虫類の飼育技術を持ったスタッフが中心となり、さまざまな生きものの生体展示を行った。具体的には「アカハライモリ」（4月～3月）、「アズマヒキガエル」（4月～3月）、「ヤマトサンショウウオ」（4月～11 月）、「カブトムシ」（7月～8月）、「カナヘビ」（7月～8月）、「ヒョウモントカゲモドキ」（4月～3月）などの生体展示を行った。特に、ビジターコテージ玄関口に設置している「アズマヒキガエル」の展示は、野外で捕まえたエサを自由に与えられる体験型の展示となっており、子どもから大人まで多くの施設利用者に好評であった。
  その他、季節ごとに「春の公園スケッチ展」（4月）、「新緑の森クイズラリー」（4月～5月）、「秋の紅葉クイズラリー」（11 月～12 月）などを開催した。
- ビジターコテージホールでは、四季折々の装飾や展示を通して施設利用者に季節感を楽しんでもらえる工夫を凝らした。端午の節句やハロウィン、クリスマスツリー、門松など、年中行事に合わせた演出は「来園のたびに新しい発見がある」と、多くの施設利用者から高い評価を得ている。こうした継続的な取組により、施設への親しみが深まり、リピーターの増加にもつながった。
- ビジターコテージ周辺では、令和5年度に好評だったハンモックやトランポリン、木のおもちゃ、草滑りに加え、季節ごとに異なる遊びや発見が楽しめる「自然素材のあそび場」づくりを進めた。田んぼビオトープでは、稲の成長過程やメダカ、オタマジャクシなどの観察に加え、生き物に関する解説パネルの設置や、生き物の様子を収めた動画の SNS 発信など、関心がより深まる工夫をした。これらの取り組みにより、子どもだけでなく、大人の施設利用者も長く滞在し、多世代が思い思いに過ごす姿が多く見られるようになった。
- くつろぎのスペースづくりでは、これまでのビジターコテージのテラスや前庭、陽だまりの丘に加え、森の林縁部やサギソウ園などの新たなスポットにもガーデン家具を増設し、季節ごとに最適な「くつろぎ方の提案」を SNS や通信誌などで発信した。これにより、施設利用者が自分のお気に入りの場所を見つけて楽しむ様子が増え、施設利用者同士の交流や読書、エクササイズなど、多様な過ごし方が見られた。また、園内での滞在時間が延びる傾向も見られ、「くつろぎの公園」としての利用の定着が進んだ。
- 園内の案内板について、令和2年度より「公園の自然と調和し、親しみのあるデザイン」をテーマに看板類のリニューアルを進め、令和4年度には現在地を示す標識 36 箇所を新たに設置した。令和

６年度はさらに、これらの標識について視認性や案内性の向上を目的とした改良を行うとともに、老朽化が目立つ他の案内看板についても段階的な入れ替えとメンテナンスを実施した。その結果、園内全体の景観がより整い、施設利用者の回遊性と満足度の向上につながった。また老朽化した南入口駐車場の大型看板４箇所をリニューアルし、多言語（４か国語）の案内ボードを設置した。外国人の施設利用者にも配慮した案内が整備されたことで、訪問が促進された。

・ セルフ（来場者自身）で公園を楽しめるプログラムとして、「ハンモック」や「双眼鏡」などの無料貸出を実施した。これらの取組は親子連れや大人の施設利用者に大変好評を博し、公園の新たな魅力となった。
・ セルフ（来場者自身）で散策する施設利用者の増加に対応する取組として、令和５年度に引き続き、季節ごとの見どころを紹介するセルフガイドボードを園内約 50 箇所に設置し、内容の充実を図った。施設利用者からは「ボードを読んで自然への興味が深まった」といった声も多く寄せられた。また、公園のシンボルであるサギソウの開花時期には、令和５年度に引き続き大駐車場からサギソウ園までの道標を設置し、初めての利用でも迷わずアクセスできるよう配慮したことで、多くの施設利用者が花の観賞を楽しむ様子が見られた。
・ ビジターコテージ研修室及びサブコテージの有効利用として、イベントで使用しない空き時間に部屋の貸し出しを行い、合計 41 回の利用があった。また、高等学校陸上部による園内の利用は 79 件あった。

イ）自然体験型のイベント及びプログラムの実施に関する業務

年間 126 回のイベントを実施し、そのうち自然体験型イベントは 112 回実施した。施設利用者の満足度は全体で 96.3%、自然体験型イベントに限っても 96.1%と、令和５年度と同様に高水準を維持した。これは、対象者のニーズに応じた内容の充実や、季節ごとの自然を活かした多様なプログラムの展開が要因と考えられる。

イベントの実施回数は令和５年度に比べてやや減少したが、より高品質なプログラムの実施に注力した。また、新たな外部人材との連携を図り、特に音楽やアートの専門性を持つ講師を迎えることで、これまで以上に多様性のあるプログラムの展開が実現した。

・ 自然体験イベント

令和５年度に引き続き伊賀や三重の自然の面白さや大切さを感じられるプログラムを開催し、特に直接生きものと触れ合える機会を多く持ってもらうことができるよう企画した。具体的には、「昆虫観察会」（４月、６月）、「田んぼの生きもの観察会」（６月）、「メダカを育てよう！」「カブトムシを飼おう！」「セミの羽化観察会」（７月）などのイベントを実施した。これらのイベントは令和６年度も申込が多く、アンケートの満足度も高かったことから、参加者のニーズと学習効果の高さを再確認できる結果となった。また、外部講師を招いた「コケ観察会」（７月）、「コウモリ観察会」（９月）、「星空観察会」（３月）なども開催し、専門家から直接、情報や面白さ、新しい視点などを得ることができると好評であった。こうしたプログラムを通じて、子どもたちだけでなく大人にも自然への興味と理解が広がる機会となり、地域全体の自然への関心を高めることに貢献した。

・ 子どもの生きる力や主体性を育むイベント

令和３年度より継続して実施している参加者が自ら考え、試行錯誤する中で生きる力や主体性を育むことを目的としたプログラム、「第４回お楽し森の学校」を開催した（11 月～３月に全５回実施）。本プログラムでは、里山の自然を舞台に、子どもたちが「自分にとっての楽しいことは何か」を考え、それを自分たちの手で形にしていく活動を行った。

令和６年度もリピーターの参加が多く、最終回には、子どもたちが自分たちでアイデアを出し合い、協力しながら、ツリーハウスの拡張やツリーデッキの新設、滑り台やブランコの設置など、「やってみたい！」という思いをかたちにしていった。自由な発想でのびのびと取り組む中で、大人も驚くような創造力や行動力が引き出される場面が多く見られ、子どもたちの成長と可能性を感じられる貴重なプログラムとなった。

・ 近隣の住民や団体、専門家との共同イベント

「乗馬体験」（４月）、「森の中でヨガ体験」（５月）、「木のおはしづくり」（６月）、「夏のキノコ観察会」（７月）、「勾玉づくり」「藍の生葉染め」（８月）、「光るどろだんご作り」（９月）、「ハープコンサート」「バンブードラム」「秋の曼荼羅アート」「クリスマスミニコンサート」（11 月）、北欧のライフスタイル・子育て入門講座（12 月）、植樹体験イベント（３月）などのイベントを開催した。

ボランティアグループである「モリメイト」と協力し、「くぬぎの森づくり」（11 月）、「カブトムシのため

の落ち葉ベッド作り」（12 月）、「しいたけ菌打ち体験」（2月）を開催した。また、近隣小学校（9月、10 月、11 月、1月）や富貴の森こども園（7月、3月）にネイチャークラフトの出張プログラムを行った。

多様な分野の地域団体や専門家との協働により、新たに多数のイベントを実施することができた。参加者からは「初めての体験ができて楽しかった」「自然の楽しみ方が広がった」といった好意的な声が多く寄せられ、イベントの種類や対象の幅も広がった。また近隣の団体や専門家との連携も深まり、公園が地域とともに育つ場として機能していることを実感できた。

・ 子どもが地域の自然環境に興味関心を持つきっかけを広く提供するイベント

「みえ森と緑の県民税」を活用した「伊賀の森っこ育成推進事業」では、伊賀市の小学生を対象に、11 回の自然体験プログラムを開催し、計 438 名の子どもたちに自然体験の機会を提供した。これにより、地域の子どもたちが地元の里山の自然に触れる貴重な体験を得ることができ、自然への興味や愛着を育むことに寄与することができた。参加した教師からは「学校では体験させてあげることができない貴重な機会となっている。今後もぜひ継続してほしい。」といった声が多く寄せられた。

・「外国にルーツのある子ども」や「発達障がいを持つ子ども」を対象にしたイベント

受け入れ体制を整備し、「外国にルーツのある子ども」や「発達障がいを持つ子ども」を対象にしたイベントを実施した。多言語での対応や障がいに応じた配慮を行い、発達障がいを持つ子の保護者会との共催による「虹の森のゆうえんち」（5月・9月）、JICA 中部との協働による「国際交流みんなでたき火をしよう」（1月）を開催した。多様な背景を持つ子どもたちが自然の中でのびのびと自己表現できる場となり、また、自然体験を通して楽しくふれあい、相互理解を深める貴重な機会となった。

・ 豊かな自然環境をベースにした北欧の先進的な自然教育やライフスタイルを学ぶ講座の開催

初の試みとして、自然保育の実践メンバーと連携し、フィンランドの生涯教育研究家を講師に迎えて、「北欧のライフスタイルと教育・子育て入門講座」を開催した。北欧の自然との共生やサスティナブルな暮らし、主体性を育む教育の考え方を紹介し、日常に取り入れられる実践のヒントを共有した。参加者からは「新たな価値観に触れることができた」といった声が寄せられ、一人ひとりのウェルビーイングについて考える機会となった。

・「森林とふれあう自然公園環境整備事業」によるイベント

「みえ森と緑の県民税」を活用した「森林とふれあう自然公園環境整備事業」を受託し、「親子で大工体験」（2月）を開催した。大工の指導のもと、参加者が協力して風のとりでの手すりやベンチを設置したことから、公園に残るものを自分たちの手で製作できたと好評であった。

ウ）三重県上野森林公園内の自然情報やイベント情報の提供に関する業務

・ SNS 等を利用した情報発信に努め、令和6年度はウェブサイト、Facebook 及び Instagram を合わせて 360 回（令和5年度は 216 回）更新をした。
・ イベント情報を中心とするメールマガジンを、イベント参加者やウェブサイトからの希望者（633 件）に、原則月1回配信した。
・ 伊賀ケーブルテレビとの連携を引き続き強化し、公園の自然情報及びイベントの取材が 23 回あった。また毎月発行される情報誌に公園の自然情報が掲載され、公園の認知度が向上した。この他新聞社の自然情報およびイベントの取材が合計 17 回あった。
・ イベントや季節の自然情報を掲載した「上野森林公園通信」（A4フルカラー）等を伊賀市内の小学校の全児童へ1、2ヶ月に1回配布を行い、近隣地域に積極的に情報を発信した。令和6年度は全9回の配布（累計約 48,500 部）となった。

②施設、設備の維持管理及び修繕に関する業務

・ 植物管理、清掃管理、日常点検、建物施設などの定期点検、巡回警備、修繕業務などにより、施設を清潔かつ快適に維持し、機能を適正に保持するとともに、異常箇所の早期発見により、施設利用者の安全な利用を図れるよう努めた。
・ 植栽木は、適切な時期に剪定を行うことにより良好な景観の維持に努めた。日常的にウォーキング等で訪れる施設利用者からは「生垣の形が整い生育が良くなった」という声が多く寄せられた。また、定期的な施肥により花木の花付きも向上した。森林内の植生管理においては、マツノマダラカミキリによるアカマツの枯死被害木を対象に、「モリメイト」と連携して 80 本以上を伐倒処理し、倒

木による事故防止に取り組んだ。

・ 花のテラスの花壇では、季節ごとにさまざまなガーデンの花を楽しめるよう育成を行い、「バタフライガーデン」をテーマに整備を進めた。シカの食害が少ないジギタリスやサルビア、セージ、ラベンダーなどを中心に植栽し、通年を通して花壇を彩ることができた。実際に多くの昆虫が花々に集まり、カメラマンが昆虫撮影のために訪れるなどの効果も見られた。
またビジターコテージのテラスでは鹿の食害を受けないため、プランターにチューリップやペチュニアなど季節ごとの花を育てた。それらの花を愛でながら休憩する方、花を前に記念撮影する家族など、施設利用者がコテージ周辺で思い思いに過ごす様子が見られた。

・ 園内設備について、建設から 26 年経過しているために多くの場所で老朽化が進んでおり、今後も修繕の必要箇所が増加すると思われる。公園内に多数ある木柵、木道、木階段などについては補修が必要な箇所の発生ごとに、随時補修作業を進めている。一方で、湿性植物園内の通路の老朽化による立入禁止措置など、公園内のいくつかの施設が十分な機能を発揮できず、来場者へのサービス低下につながっている。また、県貸与備品の廃棄及び修理不能により、効率的に公園管理ができない場合が生じている。

③県施策への配慮に関する業務

・「みえ生物多様性推進プラン」に沿って、希少動植物の保護や外来生物の駆除などに努めた。具体的にはハッチョウトンボなど貴重な水生昆虫が生息しているトンボ池に侵入したアメリカザリガニの駆除、ニホンアカガエルなどの両生類に影響を与えるアライグマの駆除活動を行った。また、生物多様性の普及啓発に努めたほか、「みえ森林教育ビジョン」の推進に向けた自然体験保育の取組として、子育て支援団体と協力し「てくてく探検隊」を年間 24 回開催した。これらの取組により、地域の生物多様性の保全とともに、自然体験を通じた子どもの豊かな成長を支援する体制づくりが進んだ。特に「てくてく探検隊」は、子どもたちの情操や感性を育む自然保育の場として保護者から高い評価を受けており、あわせて保護者同士のつながりを生む大切な場としても機能を果たした。

・ 令和7年1月より自然観察系のイベント実施の際は、イベント告知時にホームページで「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を一つの健康と捉え、一体的に守っていくという「OneHealth」の考え方を紹介するとともに、イベント冒頭には「OneHealth」の概要説明を行い、参加者への普及啓発に努めた。

④情報公開・個人情報保護に関する業務

・ 「三重県上野森林公園の管理に関する情報公開実施要領」を策定し、対応した。
令和6年度請求件数：0件

⑤その他の業務

・ 令和6年度における事故は4件であった。

（2）施設の利用状況

公園施設全体の利用者数	成果目標	令和5年度実績	令和6年度実績	達成率
	82,000 人	119,276 人	121,980 人	148.8%

顧客満足度	成果目標	令和5年度実績	令和6年度実績	達成率
① 施設利用者	80%	93.4%	94.4%	118.0%
② 自然体験型イベント参加者	92%	96.0%	96.1%	104.5%

2 利用料金の収入の実績

指定管理をしている箇所で利用料金を徴収している箇所はなし。

3 管理業務に関する経費の収支状況

（単位：円）

収入の部			支出の部		
	R5	R6		R5	R6
指定管理料	27,563,000	29,702,000	事業費	3,616,920	4,026,444
利用料金収入			管理費	25,102,713	27,075,080
その他の収入	1,415,668	1,403,996	その他の支出	0	0
合計　(a)	28,978,668	31,105,996	合計　(b)	28,719,633	31,101,524
収支差額　(a)-(b)	259,035	4,472			

※参考

利用料金減免額	－

4 成果目標とその実績

	施設利用者数	施設利用者の満足度	自然体験型イベント参加者の満足度
成果目標	**82,000 人**	**80%**	**92%**
成果目標に対する実績	**121,980 人**	**94.4%**	**96.1%**
今後の取組方針	・施設利用者数について 目標を大きく上回り、過去最高の施設利用者数となった。これまで男性高齢者が中心だった利用層において、女性や若者、親子連れ、外国人といった新たな層の来園が増加し、利用形態の多様化がさらに進展した。また「ペットと一緒に自然を楽しみたい」というニーズを背景に犬連れの施設利用者も引き続き増えており、日常的に訪れる施設利用者同士による交流も活発化している。公園が幅広い世代や多様な背景をもつ人々の憩いの場となりつつあることがうかがえ、今後もこの流れを大切にしながら、さらなる利用促進に取り組んでいく。 ・施設利用者の満足度について 令和6年度の施設利用者満足度は、目標値 80%に対し 94.4%を記録し、達成率は118%となった。豊かな自然環境や施設整備、スタッフの対応に加え、ビジターコテージでの季節ごとの展示や生きもの展示、多彩なイベントも高く評価されており、公園の魅力づくりが着実に成果をあげることにつながっている。今後も、施設利用者の声に耳を傾けながら、自然体験や交流の機会をさらに充実させ、一人ひとりが心地よく過ごせる場づくりを推進し、満足度の維持・向上に努めていく。 ・イベントについて 令和6年度の参加者満足度も高水準を維持した。これまでに培ってきた「子どもの主体性を育むプログラム」や、「多様な背景を持つ参加者に自然体験の場を届ける取組」をさらに推進していく。また、外部講師を招いて実施した音楽やアートなど感性に訴える体験プログラムは、施設利用者に新たな自然との関わり方を提供するものとして高い評価を得ており、今後はこうしたプログラムのさらなる拡充を図る。加えて、北欧の教育やライフスタイルに学ぶ講座のように、海外の先進事例まで視野を広げた企画にも継続して取り組み、「自然との共生」や「一人ひとりのウェルビーイング」につながる学びの場を提供していく。そのためにも、今後は音楽・芸術・環境・教育など多様		

	な分野の専門性を持つ外部講師や地域の実践者との連携を強化し、大人を対象とした講座の充実にも努めたい。また、住民参加による環境再生プロジェクトなど、地域とともに自然を育てる体験を創出し、公園を拠点とした学びと実践の場としての機能をさらに高めていく。 ・セルフサービスの充実 施設利用者に好評を得ていることから引き続き、園内での自由な学びと発見を支える「セルフガイドシステム」の内容を、季節変化や自然情報と連動させながら継続的に更新し、さらなる充実を図る。双眼鏡やハンモックなどの貸出ツールの活用、セルフ型（施設利用者自身で楽しむ形）のウォークラリーの定期開催などにより、セルフスタイルで公園の自然を満喫し、多様な楽しみ方を自由に選べる場づくりを推進していく。 ・公園利用方法の提案 季節ごとのおすすめスポットや散策コース、公園の新たな楽しみ方などについて、引き続き積極的に発信し、多様な施設利用者に向けた情報提供を行うことで、公園の魅力向上を図る。また、「ペットと散策できる自然公園」としての PR も継続し、犬連れの施設利用者への訴求力を高めていく。 新たな取組として、外国人利用者への情報発信にも力を入れ、SNS を活用して多言語による公園情報の発信を開始する。Instagram では特に若年層の施設利用者増につながった実績をふまえ、発信頻度をさらに高めていく予定である。加えて、ホームページの全面リニューアルを行い、公園での過ごし方や楽しみ方をわかりやすく、より魅力的に伝えるコンテンツを充実させる。併せて、日本語・英語・ポルトガル語による多言語に対応し、より幅広い層に向けた開かれた情報発信を行っていく。 ・自然環境について 園内は湿地が多く、特殊な環境にしか育たない希少な動植物が多数生息している。その中で外来種の侵入や遷移などの影響により、湿地環境が悪化している場所も多く存在する。そのため外来種の駆除や湿地環境の整備、園内の希少種や在来動植物群の再生を継続的に行っていく。 湿地の再生活動は参加型イベントとして企画し、参加者とともに湿地の生物調査や湿地の環境改良を行う。同時にその活動自体が参加者の学びや交流の場へと醸成されることをめざし、ひいては、環境保全活動の実践の場へと発展させることをめざす。 ・公園の景観について 「公園の自然と調和し、親しみやすいデザイン」というテーマを継続し、特に施設利用者から要望の多い老朽化した各種案内看板のリニューアルを随時進める。 花のテラスについては、シカによる食害が少ない品種を中心に育成するとともに、「昆虫が集まるバタフライガーデン」というコンセプトを取り入れ、四季折々に華やかで生きものとのふれあいも楽しめるような管理を行う。 ・ボランティアについて ボランティアグループである「モリメイト」については、引き続き広く広報するとともに、楽しめる活動を行うことで会員を増やしていく。特に、若い世代の加入者を増やし、活動の活性化をめざす。

5 管理業務に関する自己評価

評価の項目	評価		コメント
	R5	R6	
1 管理業務の実施状況	B	B	普段の清掃、適切な植物管理、日々の巡回による異常箇所の早期発見など、施設の適切な維持管理、環境の美化に努めることができたが、まだ修繕の行われていない箇所についてはより注意していく必要がある。
2 施設の利用状況	A	A	年間施設利用者数は、令和5年度実績を上回り、目標を上回る 121,980 人(148.8%)となった。
3 成果目標及びその実績	A	A	施設利用者の満足度、自然体験型イベントの満足度ともに目標を上回ることができた。

※評価の項目「1」の評価 :
「A」 → 業務計画を順調に実施し、特に優れた実績を上げている。
「B」 → 業務計画を順調に実施している。
「C」 → 業務計画を十分には実施できていない。
「D」 → 業務計画の実施に向けて、大きな改善を要する。

※評価の項目「2」「3」の評価 :
「A」 → 当初の目標を達成し、特に優れた実績を上げている。
「B」 → 当初の目標を達成している。
「C」 → 当初の目標を十分には達成できていない。
「D」 → 当初の目標を達成できず、大きな改善を要する。

総括的な評価	施設利用者数は、令和5年度に引き続き過去最高を記録し、さらに多様な利用形態が定着した。これまで男性高齢者の利用が中心だったが、女性や若い世代、親子連れの利用が増え、さらに外国人利用者の姿も多く見られるようになった。また「ペットと一緒に自然を楽しみたい」というニーズを背景に、犬連れの施設利用者が引き続き増加したほか、日常的に来園する施設利用者による交流の場も育まれている。憩いの場に整備したベンチやテーブルが人と人とのつながりを促し、公園の新たな役割を拓きつつある。今後も人と自然、人と人を結び、安らぎを得られる、まちのオアシスとなるような場づくりを進めていきたい。 イベントは 120 回以上開催し、参加者満足度も高水準を維持した。体験や交流を重ねられる質の高いプログラムの提供によりリピーターも増加し、地域の自然への関心を育む手応えを得た。「外国にルーツをもつ子ども」や「発達障がいをもつ子ども」への対応プログラムも着実に広がり、多様な背景を持つ参加者に自然体験の場を提供することができた。 新たな取組として、北欧の自然教育やライフスタイルを紹介する講座を開催し、自然との共生や主体性を育む暮らしについて学ぶ機会を提供した。これにより、自然を通じた一人ひとりのウェルビーイングへの関心を広げるきっかけとなった。さらに、音楽やアート、ヨガなど、新たな分野の専門家との協働によりイベントの幅も広がり、公園が地域とともに育つ場としての役割を一層深めることができた。 自然環境については、里山の適切な保全管理を継続するとともに、外来種の侵入や遷移による環境変化が課題となっている湿地の保全・再生にも継続的に取り組んだ。また、これらの保全活動は参加型で実施し、参加者の学びや交流を通じて、環境保全への理解と関心を深める契機となった。今後も、地域と連携しながらこうした取組をさらに広げていきたい。 これまで築いてきた地域住民との関係性をより深めるとともに、公園を拠点とした地域資源との連携をさらに広げていくことが重要な課題となる。また少子高齢化や価値観の多様化といった社会情勢の変化に伴い、施設利用者のニーズも変容しており、時代の流れを見据えた柔軟な対応力と、新たな公園の魅力を創出する企画力がこれまで以上に求められている。 こうした状況をふまえ、今後も職員一人ひとりの学びと成長を大切にしながら、地域住民や団体、行政、教育機関など多様な主体との対話と協働を重ね、ともに上野森林公園を育てていく姿勢を継続していく。自然公園という「広く開かれた心安らぐ場」の特性を活かしながら、人と自然、人と人とが出会い、学び合う関係性を丁寧に紡ぎ、地域の環境まちづくりにもつながる取り組みを推進していきたい。